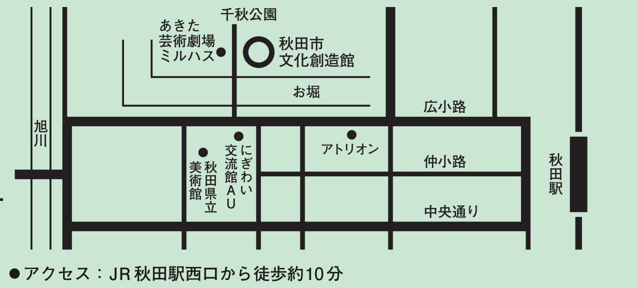
デザイン：服部一成　榎本紗織　編集：熊谷新子

秋田　市　文化　創造　館
AKITA　CITY　CULTURAL　CREATION　CENTER
〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町 3-16
開館時間 9:00–21:00
休館日・火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）
・12月29日–1月3日
お問合せ Tel: 018-893-5656　Fax: 018-893-5659　e-mail: info@akitacc.jp
公式ウェブサイト https://akitacc.jp

そう SO　する？ SURU?

8号　2025年3月



●アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

川添いより

秋田に移住して初めての冬は大雪だった。

背丈よりも高い雪の壁に、ありとあらゆる音が吸い込まれ、静まり返る夜。FF式ストーブがジーッと音を立てる横で「寒い」と独り言を呟きながら、深々と降り続く雪を眺めた。それはまるでこの六畳ほどの空間を残して宇宙が消滅してしまったかのように、ひとりの時間がただ在る。お湯をマグカップに少しずつ注ぎ足しながら、本のページをめくり、いつか誰かの手で書かれた言葉に触れる。そして、大人しく湯が沸くように、雪が降り積もるように、少しずつ自分の中に言葉が湧き、堆積していった。

> 雪国の冬はとても厳しい。これを「大変だ」と捉えてしまってはだめ。そういうものだとある意味受け入れること。そうしてこの土地の人たちは暮らしてきた。助けられながら日々学ぶ。

雪に埋もれて過ごす中で、日々感じ考えることが確かにある。それらを言葉として記すことを自ら望んだのか、それらが言葉として記されることを望んでいるのか、判然としない。けれど、どのみちすぐには言葉にならない不確かな思考や感情を、ゆっくりとショベルで掘り起こしていくように書く。凍え固まった身体が熱を帯び、少しずつ動き出す。血の巡りが良くなっていくような確かな感覚。

> 自身の思考や感情に向き合うことでより良く生きられると思うのです。

そう書いたのは、「読み聴き書く」をテーマに2023年から主催している「BOOK&WEEKEND FES」の序文にて。頁をめくり、内に耳を澄ませ、言葉をつむぐ。それは、あの冬を通じて経験したことそのもの。
この実感の正体をもっと深めたいと思い、移住してちょうど三年が経った2024年の秋、秋田市の雄和に「川添い」という場所を開いた。名前を川添村という地名から拝借したのは、川のように日々流れゆく思考や感情に添いたい、それを掬い上げる岸辺になりたいと願うから。私にとっての大雪の冬がそうであったように、それに適した風土が、秋田にはある。
本や菓子、珈琲を通じて、いつでもひとりになれる環境を。さまざまな企画を通じて、読み聴き書くきっかけを。川添いにてお待ちしています。

加藤大雅

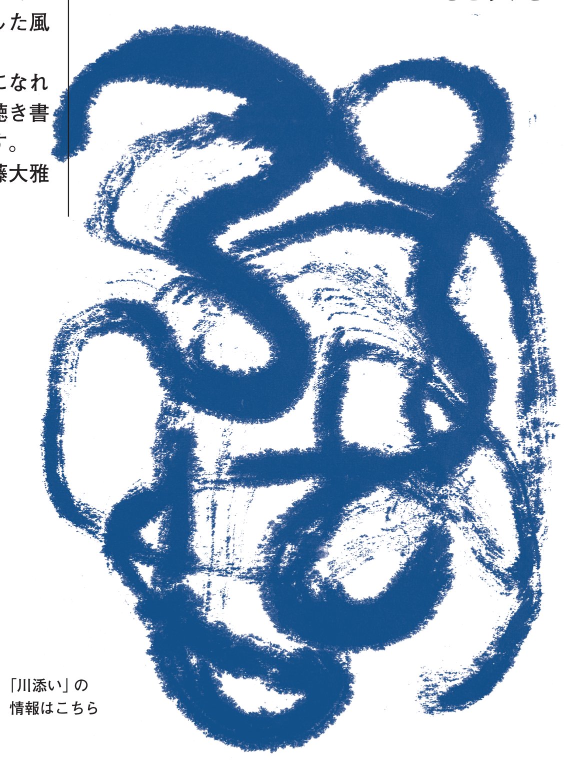
人生における孤独な季節って誰にでもあるものなのだろうか。

高校を卒業して、上京したわたしは東京の街にも、周りの学生たちにも馴染めず、ひとりふらふらと彷徨いながら10代の最後を過ごした。ひとりの時間を埋めるために流れ着いたのは、図書館本館の裏手にある小さな別館。専門書が並ぶ本館に比べて小説やエッセイが多く、いつも人影の少ないその場所で、本のページをめくったり、ぼんやり考え事をしたりする。遠くで、学生たちの笑い話す声が聞こえる。そんなときにふと思うのは「いま、わたしはこの世界に存在してはいる、けれど誰もそれに気づいていないだろう」ということ。それが寂しくもあったけれど、心地よくもあった。孤独な気持ちと、でもひとりではないという安心感。そして、言葉がいつでも側にあることはわたしを心強く励ましてくれた。

黙々と菓子を作る時間もまた、そのような孤独を孕んでいる。「本当にこれで大丈夫だろうか」「ちゃんと美味しくなっているだろうか」自分自身と対話する、静かなひと時はいつも緊張する。ただただ楽しくて続けている菓子作りだけれど、目に見えない小さな何かをひとつずつ積み上げていくような作業でもある。
そしていま、わたしを励ましてくれるのは菓子を受け取ってくれる人がいるということ。その人たちが食べてくれて、わたしの菓子は初めて完成する。孤独と向き合って生み出したものを誰かと分かち合うことの幸せは、冷たい雪の下で春を待つことに似ていると思う。

川添いは、本屋と菓子屋のふたりで構えた場所。でも、一緒にいながら、それぞれの仕事を日々それぞれこなしている。ここへ足を運んでくれる人たちにも、思い思いにひとりの時間を過ごしてもらえたらと思っている。ひとりになることで、見えてくるものや浮かんでくる言葉が、きっとわたしたちに春を届けてくれる、と信じて。

さとうゆき



文：加藤大雅 Taiga Kato
愛知県出身。国際教養大学卒業。事業支援や商品開発、まちづくりなどの分野で編集活動を行う一方、秋田市雄和の「川添い」を拠点に「読み聴き書く」にまつわる企画を行っている。2024年5月に初の共著『取るに足らない大事なこと』を上梓。

文：さとうゆき
秋田市生まれ。コーヒー屋で働いたのち、2019年秋田市にて「さとう菓子店」を開業。「いつものお菓子。いつかのお菓子。」をコンセプトに秋田県を中心に活動。

絵：長尾周平 Shuhei Nagao
福岡を拠点にする美術設計事務所「長尾美術」代表。企業や商店のアイデンティティ形成、教育や文化の発信、製品開発など、デザインとアートを横断しながら様々な分野のクライアントと社会を親密につなぐ役割を担う。

川添い（かわそい）
本・菓子・喫茶・企画
〒010-1211
秋田市雄和椿川字小鹿野戸1-18
土・日・月ほか 10:00〜17:00
※当館ショップ「〇HAJIMARU」にて
「川添い」による選書が展開

「川添い」の情報はこちら

太平山登山道の復旧について

2023年7月14日から16日にかけての三日間、秋田を集中豪雨が襲い、河川や内水が氾濫して多くの住宅、店舗、田畑が冠水した。同年6月6日に太平山三吉神社は、山頂に物資の空輸作業を行い、7月8日からは神職の方が常駐し、2020年夏よりコロナ禍で断念していた、奥宮本殿での祈祷奉仕や山小屋の運営を再開したばかりだった。
記録的な豪雨は、太平山県立自然公園地内登山道にも大きな爪痕を残した。最も人気があり、初心者にも親しまれた旭又登山道へ繋がる仁別林道は、現在も災害復旧工事中である。2026年度中に工事が完了する予定で、その後に旭又登山道中で崩落した3つの橋の復旧と山道の整備に着手するという。
現在のところ、太平山頂上へは、丸舞ルートと野田ルートが登路可能であるようだった。登山取材を計画するにあたって、前岳と中岳を経由する長めの木曽石ルートはあらかじめ候補から除外した。石川さんの考えで、菅江真澄が登ったかつての表参道であり、比較的険しいと言われる野田ルートから登ることにした。
しかし、私は途中でギブアップした。私が行くことができたのは、不動滝までだった。
登山を終えた後、創造館で河辺山歩会の石塚稔さんにお会いする機会を得た。石塚さんは丸舞登山道の麓に生まれ育ち、太平山を50年以上登っておられるという。私が石塚さんを知ったのは、野田口の駐車場に石塚さんが作成した地図が、電話番号とともに掲示されていたからだ。各登山道の被害状況や危険なポイントを調査しチャート化して、公開されていた。旭又登山道はもうしばらく通れなくても、その他のルートで太平山を楽しむことができるんですよ、と石塚さんは教えてくださった。石塚さんは、きっと今も人が入らないと荒れて塞がれていく山道をこつこつ歩いていらっしゃるのだろう。
休日にランニングしていると、あのとき登った太平山が左手に見える。山が氷の彫刻のように見える日もあれば、薄墨色にけむる日も、虹が架かる日もある。自分がほんの少しでもあそこにいたのだと思うとなんだか嬉しくて、岩や倒木を這いつくばって登った記憶も愛おしい。しんとした山に包まれた心地を私は決して忘れない。次は頂上まで登りたい。奥宮にお参りをして、できることなら今は閉鎖されている山小屋にも泊まってみたい。そう思いながら、太平山を眺める。

文：熊谷新子（当館スタッフ）

●クロストーク
「秋田、能登、クンストハンドヴェルク（アートと工芸）」
伊藤俊治（美術史家）＋赤木明登（輪島塗師）
進行：石倉敏明（芸術人類学者）
日時：2024年11月4日（月・休）
会場：太平山三吉神社総本宮 斎館2階
主催：辺境地点（田村一）　共催：秋田市文化創造館

新刊『秋田　環日本海文明への扉』（石川直樹氏との共著）を執筆した土崎出身の伊藤俊治氏と、『工藝とは何か』（堀畑裕之氏との共著）を自らの拙考編集室から刊行した赤木明登氏を招き、三吉神社や三吉梵天祭の歴史的文脈や、能登半島地震により倒壊した輪島塗木地師（池下満雄氏）の工房再生のプロセスをたどり「工藝的復興」について話しました。

イベントレポートはこちら

大雨に備え最小限必要なこと

●本当に役立つ知恵・技を伝授！「防災ITSUMO講座–水害編–」
日時：2024年12月7日（土）
会場：秋田市文化創造館1階 コミュニティスペース
主催：秋田市文化創造館

楽しく学べる防災のプロジェクトを全国各地で展開してきたNPO法人プラス・アーツの小倉丈佳さんを講師としてお招きし「防災ITSUMO講座–水害編–」を開催しました。自分が暮らす地域のハザードマップを広げて調べてみたり、防災のクイズをしたり、大人も子どもも楽しみながら、ふだんの生活に取り入れられて、災害時にすぐに役立つ備えを学びました。

写真：徐津君　Sinkun Jo

グラフィックレコーディング：齊藤夏帆（当館スタッフ）

野生を取り戻したおろちね

石川直樹

一カ月におよぶチベットでの登山遠征を終えて帰国した直後、ぼくは秋田県へ向かった。目的は、秋田市の〝ふるさとの山〟として知られる太平山という山に登ることであった。太平山は秋田県中央部に位置し、田畑に豊かな実りをもたらし、航海の安全を守ってくれる山として、古くから人々の信仰を集め、市民に慕われてきた山でもある。その昔は太平山信仰に関わる修験者の修業の場でもあった。

調べてみると、太平山という名の山は日本列島内に10以上あり、山ではないが、沖縄の宮古島も琉球王国時代にはそう呼ばれていた。中国語で「大きな平らな山」という意味で、島にもこうした名があてはめられたのであろう。日本国内にいくつかある太平山のうち、最も多いのが秋田県内で、5つの太平山を擁している。お隣の山形県も含めたら東北の日本海側に6つもの太平山が存在していることになる。中国に語源があると仮定するなら、日本海を介した大陸との交流があった時代の前後に、海からの視点で日本の山に名が付けられたということになる。だとすれば、航海の安全を守る神として知られているのも、合点がいく。

そんな太平山なのだが、2023年7月に記録的豪雨に襲われた。一年半以上経つが、登山道の復旧もままならない状態だという。どの程度の被害なのかを確かめるべく、ぼくは友人と野田口登山ルートへ向かった。砂利道を車で進んでいくうちに、いつしか鬱蒼とした森の中に入り、川にぶつかる道路の終着点こそが、登山口であった。

一般的に険しい道として知られる野田口を選んだのは、かの菅江真澄がこのルートから太平山に登ったと言われているからだ。菅江真澄は江戸時代後期の旅行家であり希代のフィールドワーカーでもあった。彼は89冊から成る「菅江真澄遊覧記（明徳館献納自筆本）」なるものを残しており、その中に『月のおろちね』という巻がある。〝おろちね〟とは太平山のことで、古くは大蛇岳（おろちだけ）とも呼ばれていたらしい。

さて、野田口登山道の入口には、看板が立てられていた。「沢付近一部崩壊により一般登山者（初心者）は通行できません。秋田県・秋田市」と書かれており、さらにその下に、詳しい注意書きがあった。

そこには「通行注意」と大書され「野田登山道は豪雨により歩道が崩落し渡渉が必要で増水時は通行不可。鳥居より先は山崩れのため危険度が高いので迂回路をご利用下さい」などと赤字で強調されているではないか。

そのときの自分はヒマラヤの8000メートル峰に登って帰国したばかりだから、おそらく登山の初心者ではない…はず。だから、自分はこの先に進む資格は一応あるだろう、と考えた。それに、いくら豪雨による被害があっても、所詮は無雪期の低山である。行ける、とふんで、歩き出した。

するとしょっぱなから躓いた。川に架かる橋がなくなっていて対岸に渡れない。川幅およそ3メートルほどの小さな川である。足が濡れそうなところに川原の石を投げ入れ、飛び石伝いにどうにか渡った。川のすぐ後に、注意書きにあった鳥居が出てきた。菅江真澄の『月のおろちね』にも描かれた〝中の鳥居〟である。手を合わせて、いよいよ登山道に分けいった。

山はどこから山なのか。海抜ゼロメートルから、と答える方もいるだろうが、日本の山は山岳信仰が根付いていたから、山は麓の鳥居からはじまる、とも考えられる。〝中の鳥居〟はまさに太平山の入口ということになろう。

日曜日の低山といえば人でにぎわうものだが、誰一人登山者はいない。豪雨災害があって以降、登山者はほぼ入っていないらしく、草があちこちに生え、大きな落石が道を塞いでいたりして、登山道は荒れていた。ぼくは途中で道を間違えて枯れ沢を登ってしまい、引き返すというミスも犯した。

不動滝や女人堂といった菅江真澄が目にしたのと同じ場所を通りつつも、頂が見え始める直前から藪漕ぎ状態となり、最後は斜度が増して、草をつかみながらどうにか登っていった。低山と侮った自分が馬鹿だった。これはなかなか大変な山行になったな、と思いながら時計を見ると夕刻が近づいていた。頂上はまだ先で、その手前に〝弟子還（でしがえり）〟という難所が見えている。『月のおろちね』にも険しい岩場として描かれている弟子還を越えて先にいけば、間違いなく下山時には真っ暗闇となってしまう。ヘッドランプを持っていなかった自分は頂上を前に下山することを決意せざるをえなかった。

車を置いた場所に着いた頃には日が暮れていた。闇に包まれた里山はヒマラヤより恐ろしい。市民の憩いの山は豪雨の影響で荒れ果て、わずか一年足らずで、野生を剝き出しにし始めていた。太平山は登ってみると「大きな平らな山」では決してなく、たしかに大蛇のようにうねった山稜に岩が剝き出しになった武骨な山であった。次は菅江真澄が登った7月頃に再挑戦したいと思うが、果たして登山道は復活しているだろうか。していてほしい、と心から願うばかりである。

写真・文：石川直樹　Naoki Ishikawa
人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら作品を発表。2024年に8000メートル峰全14座登頂を達成した。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）、新刊に写真集『飛鳥―藤原』（夕書房）、『K2』（小学館）など。当館WEB連載「あこがれのひと」では、大日堂舞楽、中国料理「盛」、猿倉人形芝居を撮影。

新しい光は荒波を越えて

秋田駅中央改札口脇の「NewDays」で、期間限定販売されたご当地スイーツを買ってみた。瓶詰めプリンが並ぶ冷蔵ショーケースに、正方形の黒箱がひっそりと置かれていた。フランス菓子専門店「DEUX FEUILLES（ドゥ・フィーユ）」の生チョコレートで、純米吟醸酒「雪の茅舎」とその酒粕を使った大人気商品らしい。

東京に持ち帰るつもりだったのだけど、私たちは週末の取材で疲れていたから、滞在先のホテルで食べてしまった。古書店・灯台の進行案を読み合わせていたのだった。数日前から降り続いた雪はやんで、天気予報が明日は「晴れ」だろうと伝えていた。

商店街や公園、駅周辺で開かれる「ブックフェス」には長い歴史があって、最近は近隣の文化施設を巻き込んだ一大行事になりつつある。もっとも、商談主体のブックフェア（見本市）とはちがい、たいていは地元の「本好き」が集う互助のようすだ。

秋田で活動する市民団体「ほんのたねあき」もそのひとつだ。ふだんは古本市や読書会を催している。そのメンバーである乃帆書房の店主原さんが関心を持ってくれて、私たちは1月19日に秋田市文化創造館で、ヴァージニア・ウルフ著、葛川篤訳「灯台へ」の刊行記念イベントに出演することになった。

ヴァージニア・ウルフ（1882-1942）はロンドンで活動した小説家・劇作家で、現代的な文体で人気がある。代表作として知られる、『ダロウェイ夫人』（波）などの著作が20世紀モダニズムの代表作として知られる。講演に基づくエッセイ『自分ひとりの部屋』は、フェミニズム運動のさきがけとしても評価される。病気がちな生涯を送ったが、レナード・ウルフ（夫）と出版社ホガース・プレスを経営した記録家でもあった。

1927年に彼女が発表した「灯台へ」は、視点切替や自由間接話法を巧みに組み合わせて、ある夏の別荘に集う人々の思い出が風景に溶け込み、やがて誰のものでもない時間に変わる姿を描く。日本でも世代を超えて愛され、何人もの訳者が新訳文庫から復刊されて話題になった。

そうこうするうちに、日本で初めてこの小説を訳した人物のことを、すっかり忘れられたのだろう、と悔しくやその青年が秋田市土崎の出身で、『種蒔く人』創刊メンバーの後輩世代に当たるなんて、ほとんど誰も知らなかったにちがいない。

1931年に日本初訳の「灯台へ」を掲載した『詩と詩論』は、当時の新鋭詩人たちが新精神（エスプリ・ヌーボー）を標榜して創刊された。訳者の葛川篤（1907-38、本名：河田儀衛）は、秋田中学校（現：秋田高等学校）を飛び級し、東京商科大学（現：一橋大学）に入学した秀才肌。銀行に勤めながら、マルセル・プルースト、アンドレ・ジッドといった当時最新のフランス小説も訳した。地元の名士たちの親から専業の許しを得た矢先に結核を患い、32歳で亡くなった。

翻訳当時、まだ20代だった葛川は、挑戦的なウルフの試みを日本語へ移そうと工夫を凝らしたようだ。原著の構文、句読点をなるべく保ち、「意識の流れ」とも呼ばれる語り口を損ねないよう努めている。心理描写には苦労したのか、「静寂」「悲嘆」「情感」など、大仰な漢熟語がやたらと使われて、訳者の興奮ぶりが窺える。原著のやわらかなニュアンスに比べると、波や光といった形がないものの描写は厳かで、荒々しい。葛川は、東京モダニズム精神あふれる文芸誌に関わりながら、遠い異国の海辺の光景にふれて、ふるさとの港町を思い出していたのかもしれない。療養中に書いたエッセイ「病弱者の文学」でも、陰鬱な冬空の下で追憶に生きると自嘲しながら、久しぶりに明るい朝の光は、荒れ狂う潮波のように「美しい音楽」だと語っていた。

文：作家の手帖 sagasa no techo

小澤みゆきと笠井康平による、2022年結成の文芸表現ユニット。21年4月に『もの書き』が生活に役立つ知識を持ち寄るメディア「作家の手帖」を立ち上げ、創刊号から「病弱者の文学」という一つのテーマのもと活動する。

小澤みゆき Sawa Ozawa
会社員兼作家、編集者、編集者。「かわいいウルフ」（亜紀書房、海鳥社）、『大恋愛』（自費出版）、ヴァージニア・ウルフ『波』（岩波文庫）、森山恵『駅、早川書房』に社外編集として関わる。

笠井康平 Kohei Kasai
作家・編集者、主著に『さびしがりな人たちの居場所と送信』。近著に『文化芸術の評価指標体系の開発計画に「役立つ」のか』（早稲田大学、2020年冬号）、現代短歌のアンソロジー『ねむれない夜に』（書肆侃侃房）に短歌で参加。

土づくりの様子。昨年も使用した土に新たに肥料を混ぜ込み新たな苗をむかえました。
写真：安藤陽夏里 Hikari Ando

11月のトークイベント「土地を味わう、活かす食事」では、にかほ市のレストラン「Remède nikaho」のシェフ渡邉健一さんをお招きし料理のデモンストレーションを行なわれました。
写真：伊藤靖史 Yasufumi Ito (Creative Peg Works)

1月に開催した「プロジェクト・コモンズ！ 実行編｜秋田市を使うトレーニング」での一コマ。アーティストのトモトシさんが夏に秋田で撮影した映像を確認しながら、その夏のシークエンスを冬の街で再現。写真：伊藤靖史 Yasufumi Ito (Creative Peg Works)

PARKは季節を巡る

「PARK｜いきるとつくるのにわ」（以下：PARK）では、文化創造館や中心市街地をフィールドに、クリエイターや専門家、秋田に暮らす人々と一緒に、生活にまつわる様々なキーワードを共有しながら創作活動を展開してきました。

少し暖かい5月、ここでは春を感じる頃、3年目となる野菜栽培が始まりました。土づくりから日々の世話、収穫までをプロジェクトメンバーと行っていきます。夏も盛り、7月後半にもなると、プランターやグリーンカーテンを設置した屋外デッキは青い葉を元気に伸ばし、通りすがりの人々の目も集めていました。

今年度からはじまった、プロジェクト「まいごごっこ」ではメンバーと共に街へ繰り出し、歩くことで街の余白を見つけ、自分達がどのような場所を使っていくことができるのか、共有することを試みました。

自分の暮らす場をつづさに観察しながら、様々な街のプレイヤーと出会うことで改めて気づく景色や視点もあります。トーク・ワークショップシリーズでは、パフォーマー、編集者、料理人、デザイナー、経営者など多様な領域で活動する方々を招聘し、その実践や思いに触れるイベントを開催しました。

何か新しい事を始めるとき、それは案外ひとりでもできてしまうかもしれません。でも、誰かの活動の雰囲気を感じながら、たまには言葉をかわす距離、ちょうど庭を介した隣人との距離に身をおきながらやってみることは、やりたいことを実行できるコツなのかもしれません。

季節を巡ってきたPARKは、来年度さらに活動を街へ広げます。参加のかたちは色々です。

文：武田彩莉 Ayari Takeda
北海道生まれ、秋田市在住。秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科修士課程に在籍、AIRや滞在制作型のアートプロジェクトの研究を行う。「PARK｜いきるとつくるのにわ」プログラム・コーディネーター。

mizutamaさんとの出会い

秋田で絶望の淵に立っていた。私は大阪芸術大学での学部時代、文化創造館前館長の藤浩志さんが考案した「かえっこ」というプロジェクトに取り組んでいた。「かえっこ」とは、バザールのような形でおもちゃを取り替えっこして、そのシステムすらもアートとして捉えるプロジェクトである。藤さんはNPO法人を立ち上げ、秋田の美大にいるという。秋田に、何かあるのではないか。期待を背負って秋田公立美術大学の大学院に入学したが、秋田のアートの土壌になかなか自分の身体が馴染まなかった。今までの経験が何ひとつ活かされなかったのだ。

そんなとき出会ったのが、mizutamaさんだった。話をしてみると共通点があって、親しみを感じた。mizutamaさんの出身は岡山で、私が広島。mizutamaさんは東南アジアを中心にレジデンスアーティストとして活躍していて、私はつい先日インドネシアで制作を行ったばかり。mizutamaさんが大阪府の此花区でFIGYA（フィギャ）というアートスペースを運営していること。

mizutamaさんが創造館のレジデンスを考えるために秋田に滞在すると聞き、私は手伝わせて欲しいと直訴した。そして気がついたら私がFIGYAにいた。mizutamaさんのお子さんと遊んだり、彼を慕う若手アーティストと話し込んだり、大阪の空気を吸いながら、mizutamaさんは集団の中のグループ感を重要視していると思った。

それは秋田でのmizutamaさんとの十日間で確信へと変わっていった。mizutamaさんはまず自分が心を開いて相手と向き合う。すると相手も心を開いて、なんでも話してしまう。その高揚感が徐々に周囲に伝播していく。

今回のプロジェクト「mizutama練習プロジェクト−10デイズランスルーー」は、〝練習〟と称して市民の皆さんのやりたいことを実現する企画だったが、mizutamaさんは一緒になって盛り上がった。一緒に踊るような気持ちが心地よかった。それは創造館スタッフの方々に対しても同様で、mizutamaさんに関わる人全員がプロジェクトを自分ごととして捉えるようになっていった。

そんなmizutamaさんが作ったわいわい感が続いていけばいい。緩やかな非日常が創造館にとって当たり前の光景になっていくことに期待したい。

文：高升梨帆 Riho Takamasu
秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科1年在籍。土着から生まれるアートプロジェクトに「寄生」の知恵を活かし、アートマネジメントを研究中。展示「あのビル」（秋田2024）、プロジェクト「かえっこ in 千鳥文化」（大阪2023）に関与。

●mizutama練習プロジェクト−10デイズ ランスルーー
開催期間：2024年11月7日（木）−17日（日）
活動拠点：秋田市文化創造館
主催：秋田市文化創造館

10日間という限られた時間で、アーティストのmizutamaと創造館に訪れる多様な来館者のチャレンジリてみたいことを「練習」として取り組み、記録するプロジェクト。館内の様々な設備や機材、場所の新たな活用も試みました。

「冬に〈たいよう〉をつくる」練習

「凧を飛ばして熊鈴を鳴らす」練習

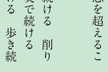
そうする？占い

今号のそうする？占いでは、「〈星座別〉この色にトライ」です。あなたの創造性がより生き生きする色は何か？を占ってみました。今回も各星座の表現者のおまけつき。

牡羊座
3月21日−4月19日
〈クリムゾンレッド〉

情熱と瞬発力を表す赤の中でも燃え上がるようなクリムゾンレッドは牡羊座の直感をさらに引き出し、創作を大きく前に進めるエネルギーを与えてくれます。作品に使っても。
牡羊座の表現者　ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ　3月30日生

牡牛座
4月20日−5月20日
〈熱帯雨林のグリーン〉



みずみずしい森のグリーンは、五感に働きかけ、じっくりと作り上げていくことが得意な牡牛座の創造に豊かさを与え、確かな実りへと導きます。生活のどこかに取り入れてみては。
牡牛座の表現者　キース・ヘリング　5月4日生

双子座
5月21日−6月21日
〈レモンイエロー〉

知的な刺激が必要な双子座には、ひらめきを刺激するレモンイエロー。好奇心を活性化し、軽やかな発想と柔軟な視点で新しいアイデアを生み出すきっかけをつくってくれます。
双子座の表現者　ジョルジュ・ルオー　5月27日生

蟹座
6月22日−7月22日
〈柔らかなムーンシルバー〉

月の光のように辺りを優しく包み込むムーンシルバーは感情と深く結びついているため、蟹座の繊細な表現力に働きかけ、感覚や記憶を創作に映し出すかを高めます。
蟹座の表現者　マルク・シャガール　7月6日生

獅子座
7月23日−8月22日
〈太陽のゴールド〉

燦然と輝くサンゴールドは、獅子座の自己表現を最大限に引き出し、創作に自信と誇りを与えてくれる色。堂々とした創作へと導きます。制作の道具に取り入れても良いかも。
獅子座の表現者　マルセル・デュシャン　7月28日生

乙女座
8月23日−9月22日
〈洗練されたサンドベージュ〉

落ち着きと精密さを持つサンドベージュが、乙女座の細やかな創造力を支えます。作品の基本となるトーンをこの色にすることでその造形が生きてくるでしょう。
乙女座の表現者　菱田春草　9月21日生

天秤座
9月23日−10月22日
〈ローズピンク〉

バランスがとれた美意識を象徴するローズピンクは、天秤座の洗練された感性と相性が良い色です。制作物に調和が欲しいとき、この色を取り入れてみては。
天秤座の表現者　カラヴァッジョ　9月28日生

蠍座
10月23日−11月22日
〈ディープパープル〉

深遠でミステリアスなディープパープルは、蠍座の探究心を刺激し、魂の奥底から湧き出る創造力を解放してくれる色。ノートやペンなど文具・画材に取り入れるのも効果的です。
蠍座の表現者　クロード・モネ　11月14日生

射手座
11月23日−12月21日
〈フレイムオレンジ〉

自由と冒険心を象徴する炎のオレンジは、射手座の直感的な創造力を活性化し、新たな表現へと導きます。射手座の冒険心と自由な発想の燃料になるような色です。
射手座の表現者　藤田嗣治　11月27日生

山羊座
12月22日−1月19日
〈夜空のネイビー〉

深く落ち着いたミッドナイトネイビーは、山羊座の知性と堅実さを表しています。この色はどんな作品に使っても、山羊座の構築力を支え、確実な創作へとつなげてくれるでしょう。
山羊座の表現者　ポール・セザンヌ　1月19日生

水瓶座
1月20日−2月18日
〈ターコイズ〉

光を放っているように鮮やかなターコイズは、水瓶座の革新的な発想を促し、新しい創作の可能性を広げます。思い切ったやり方で大胆に使ってみるのがおすすめです。
水瓶座の表現者　村上隆　2月1日生

魚座
2月19日−3月20日
〈ラベンダー〉

霧のように幻想的でふわりと広がるラベンダーカラーは、魚座の直感力を高め、良い意味でとらえどころのない、夢のような創作を導きます。アイデアを出すときに使ってみて。
魚座の表現者　岡本太郎　2月26日生

占い：西原珉 Min Nishihara キュレーター、心理療法士、当館館長、東京藝術大学先端芸術表現科准教授。
星座モチーフ：牧野心士 Shinji Makino 秋田県生まれ。グラフィティアーティストとして絵画作品の他、幅広いジャンルで制作を行う。当館スタッフ。

受付日記②

この頃は雪に押されて、押し返して、黙々と道をひらいている。

除雪をするとき朝の日差しがまだ薄くて、鈍いひかりの底から、大陽はたしかに雲のうえにあるのだということが、いつでも新たな発見のように感じられる。

総合案内には出窓があって、受付デスクから少し屈むと建物の向こうに空が見える。切れ目のような青空を見た時のもちもといえば、じっと胸にこらえておきたいような嬉しさ。

掲示物を整理するために正面玄関へ行くと風が吹き込んでいる。木辺の冷気がぞっと染みる。

すれ違う人に寒いですねと声を掛けるとき、吹く風が、人のこころのやわらかな内側へ触れてまわっていくように感じる。私はほんとうに、人間のことばの始まりは寒いねという所から芽を吹いたのだと信じている。

こんな寒い日に会う人はみんな遠くから来たように感じる。

午後の三時半ぐらいに、以前小さな約束していた方が不意にいらっしゃった。

雪のせいもあって、地球の果てからやって来たみたいに驚いた。お礼を述べたいけれど、通りいっぺんの挨拶ばかり口をついて、思いと言葉がこんがらがって、びっくりしたの、とありがたさ、はずかしさが、ばっと、ほんとうに寒いですねという言葉になって産まれた、私のうれしかったきもち を、間に合わせに借りたコートのような言葉で投げかけてしまったことが悔やまれて、しばらくもどかしくいた。

帰り道は同僚たちと歩く。今朝作った道がもう雪の下にある。あらゆることは流転してゆくのだもの、雪を盛って、崩して、また盛ってゆく営みも、幸福のうちに数えている。

あられ雪にめちゃくちゃに打ちのめされながら、私の領分は身体一つであるということを思う。心はからだにすっぽりと包まれて、吹雪も知らずに晩ご飯のことを考えている。いま在るということは信じがたくて、有難いなあということを、のんきだけれど切実に思う。

文：黒木美佑（当館スタッフ）

浮かぶごちそう

好きな洋食店があった。

秋田市中通、市民市場の近く。

茶色いタイルの外壁にまじかくの黄色い看板。まるいテーブルと椅子たちがくる」と書いてある。

木製の扉を開けると広がるどこか懐かしいような店内。テーブルには赤と白のチェック柄のクロスが敷かれ、今の飲食店では珍しく灰皿が置かれてある。

枠から文字までがすべて手書きのメニュー表はイラストもユーモラスで、人気のトルコライスの横に主張強めのベリーダンサーがいたり、とんかつは皿の上にブタが丸々一頭のっていたりする。すきだ。

最初に食べたのは「ハンバーグとオムレツ」だった。デミグラスソースがかかったハンバーグの横に、ふんわりとした甘いオムレツがのっていて、それにライスとわかめスープが付いてくる。胃袋がおいしさでミチミチになる。

店を出るとき、ごちそうさまでしたと伝えると厨房から「ありがとう」と低く頼もしい声が返ってくる。この声の主が、あのふんわりオムレツを作ってくれているのかと口元がゆるむ。

たまに無性においしいものが食べたいときがあって、そういうときはちゃんくるだ、と強く腹に誓った。雨の日の仕事終わり、夜は営業をしていない日もあったが、その日は電話をかけるとこれから開けてもらえることになった。

店に入ると店主さんと常連さんが将棋を指している最中だった。少し離れた席に座り、私のために店を開けてくれた感謝の意を込めてメニューの中で一番高いステーキを注文した。

静かに対局が続く店内で、私はひとり、肉のうまみを噛みしめた。

2024年5月末、れすとらんちんくるは営業を終了した。

黄色い看板は外され、張り紙には店主さんのしっかりとした字で「長い間ありがとうございました。」と書かれてあった。

長い間。の中のほんのわずかな時間。私はこの場所であのおいしさを頬張った記憶を思う。これからもおいしいものを食べたいとき、思い浮かぶのはきっとあちんくるだ。

文・絵：金子聖英（当館スタッフ）

れすとらんちんくるの「ハンバーグとオムレツ」

缶詰加工所の話

秋田市に井田にある藤原缶詰加工所は、持ち込んだ山菜などを缶詰に加工できる、季節限定の小さな店だ。

大学院生の時にたまたまそこへ行き着いた私は、ごく一般の人々が、自分で採ってきた山菜やきのこを缶詰にして、取材させてもらえるという慣習があることに仰天し、研究と称して取材させて貰い、大変お世話になった。

その藤原さんに久々に連絡を取ってみると、秋田市に3店舗ある加工所の一つが数年前に閉店したと言う。そして閉店間際に藤原さんのところへ、お客さんを紹介したいとの相談があったと聞く加工所のひとつがいつもお客さんを別の加工所へ繋げてから閉店を冠する船木さんが1980年に開業し、娘夫婦の津田さんが後を継いだ。設備の老朽化などを理由にお店を閉めることにしたのが2023年。商人気質な藤原さんに後を託した。店を閉めて間もなく、大雨で東通用田にあった店舗は冠水した。閉店の気持ちの整理もつかないまま店舗があった場所は今、駐車場となっている。

山菜の時期になったら未だに落ち着かない気持ちになる。

10年くらい経たないうちに辞めた実感が湧かないのかなぁ。

思いを馳せるように、妻の久美子さんは大雨被害の後、浸水した缶詰の損害について保険会社の人にあげるんですか、意味がわからないと言われて貰えなかった、という話には、一緒になって笑った。知らなければそうだろうなぁ、と思う。

誰かに缶詰を送るために、手間と時間をかけるのはリスクを負う。

下処理は大変なんだけど、美味しいんだよと満足気な人。山が好きだと言って、採りたての山菜を使用者に出会った人々の不思議な行為は、缶詰にすることで、ようやく私の腑に落ちたのだった。

藤原さんのところへ電話を掛けてくる。誰かに送る段ボールの缶詰が、残った小さな加工所に持ち込まれた缶詰になるのだろう。

文・写真：中須賀愛美（当館スタッフ）

●藤原缶詰加工所
〒010-1421 秋田市仁井田本町2丁目17-16
TEL 018-839-1144
営業日時（天候や状況により変更あり）
（春）5月上旬〜6月下旬（秋）9月下旬〜11月中旬、
朝7時〜午後5時（秋は午後4時まで）

●「灯台へ」刊行記念トークイベント
日時：2025年1月19日（日）
会場：当館1階コミュニティスペース
主催：ほんのたねあき
※同時開催：読書会「図書館で読む葛川篤」

ヴァージニア・ウルフ著「灯台へ」
日本初訳・葛川篤訳
購入は「作家の手帖」ウェブサイト
https://genkoryo.com/toudai/
または当館ショップ
「○HAJIMARU」にて販売

一月の朝、八月の太陽

八月三日　日の出時刻は四時四十分

四時半に私は家を出て車に乗る。畑は東のほう約十分、太陽のひかりの眩しくないうちに到着する。時には大盛りのコンテナを積んだ軽トラックも畑に着いて、缶コーヒーひとつから今日が始まる。桃はあかつきの収穫。午後に出荷が控えているから、午前が一番の勝負どき。

太陽が南から西に移る頃には暑さで干からびてふらふら畑の近くにある横手やきそばのお店に倒れ込んで大盛りを注文。クーラーが効きすぎてないぐらいがちょうどいい。塩分と水分の摂取。それだけを考える昼には大盛りやきそばがちょうどいい。この日太陽が沈むまでに五十一分。その少し前から、桃の色は識別しづらくなり果実が傷んでいるかどうかがわからなくなる。沈みきった太陽を追いかけて帰る。

八月二十一日　日の出時刻は四時五十七分

夜明けの風が静かに冷たいような気がするのは収穫も終盤に差し掛かろうとしているからだろうか。桃の個が少しずつ森になる。傷ついて落ちた実は土に溶ける。おいしさが変わることはないのだとしても。まだ強く刺さる陽の光が柔らかくなっていくころ、今日ははじめてぶどうを収穫した。「涼香」というそれは私がこの町に通って二年目の春に植えて三年が経ち、今年すこしだけ実をつけたもの。

九月十二日　日の出時刻は五時十分

町は稲刈り、リンゴの収穫を待った。暑さの頂点を越えても草は伸び、カラスやヒヨドリ、スズメバチも果実を求めて飛びまわる。草刈りをしていたら、頭からの尾まで綺麗に脱皮した蛇の殻をみつけた。草の下を這う蛇は根を食う害虫を食う畑の守り神で、よく見つけては「頼にいれて飾るといい」と言われる。太陽が沈むのは五十二分、陽は背中の上で傾いて、私は時にりんごの大陸に隠れながらただ草を刈り続ける。

五時五十二分、一枚の写真を撮った。

エノコログサに静かにとまったモンシロチョウに、重なって白く澄んだ羽根に見惚れて、単焦点のレンズ、息を止めて近づいて、私に気づかないようにゆっくりとその高さまでしゃがんで、私に気づいて、飛び立ってしまうかもしれない焦りとピントを合わせる。音を立てないように、シャッターまで息を止める一分。ファインダーから目を離したらチョウは消えて辺りも暮れた。

＊

町には雪が降りもって、あんなに毎日朝から晩まで通っていた畑に続く道も塞がってしまって訪れる回数が減った。その間、樹々は冬眠する。春に芽を出すために栄養を蓄えているのだ。それが私には少しだけさみしい。

一月十六日　日の出時刻は六時五十八分

除雪車が家の前を通り過ぎて、日の光で雪が緩みだす朝。桃とともに生きたような頃を思い返す。夏が、冬のわたしの栄養になる。

文・写真：瀧澤涼花 Suzuka Saito
山形県出身、秋田公立美術大学を卒業して横手市十文字町で農業を営む行をしている。わたしの心が動いても、景色は進んでいる。りんごの木は急き、花が咲き、実をつける。果樹は過ぎていく時間や、人にはない生き方を教えてくれる。そんな毎日をひとかに少しずつ撮ること、執筆することで記録している。

2024年2月24日（土）開催の第1回チャレンジマーケットの様子。〝鋳物技術を活用したホットサンドの提供と焼き印体験〟で出店した武藤元貴さん

使用したものはアイリスオーヤマさんの製品で、1台6,000円ほどで購入。シンプルかつメンテナンスしやすく使い込んでいる。同じ家の会社として、一緒に仕事ができたら嬉しいと野望を持ちつつ取り組んでいる。

●有限会社武藤工芸鋳物
〒010-0822 秋田市泉外旭川境内川原222-15
TEL 018-822-3329
●第3回チャレンジマーケットは、2025年5月6日（火・祝）の開催予定です。みなさんのご出店をお待ちしております。

記事全文はウェブサイトにて

チャレンジマーケット出店者を追いかけて
ワクワクをカタチに。
鋳物屋による
ホットサンド提供の挑戦

武藤元貴さん（有限会社武藤工芸鋳物 専務取締役）

当館が2024年から開催している「チャレンジマーケット」をご存じでしょうか。「チャレンジマーケット出店者を追いかけて」では、〝やってみたい〟にチャレンジした、出店者、その後の活動や展望について、お話を伺います。

チャレンジマーケットへの出店理由について

普段は〝鋳物〟という金属製品の製造・販売をしています。主に橋やトンネルについている銘板や看板・表札を受注生産しています。

他にもオリジナルロゴを焼き入れる直火式のホットサンドメーカーの販売も始めたのですが、出店することで、新商品やサービスに対する生の声が聞けること、小売として飲食の経験も得られると思い、ホットサンド屋として〝電気式ホットサンドメーカー〟を新たに用意し出店しました。

鋳物を活用した新商品開発の想い

そもそも〝鋳物〟の認知度が低いんです。認知してもらうために新商品を開発したり、他社が取りこぼしていた面倒やらないことにチャレンジしています。

自分はお客さんと話すのが好きです。カタチにする専門的な細かいやりとりが出てきますが、それが楽しい。その上で鋳物は手仕事なので掛け合わせが自分の強みです。技術を残すのはもちろんのこと、チャレンジの仕方やそのマインド部分も継承していきたいです。

作った鋳物製品で〝ホットサンド屋〟をやってみる

普段のマルシェと違い、「チャレンジマーケットでチャレンジしよう」だったので、作った鋳物でホットサンドを提供しようと思いました。電気式ホットサンドメーカーを使用したアイデアとして、取り外せる鋳物のプレート部分をオリジナルデザインでカスタマイズが出来ると。考え方はサードパーティー製のスマホカバーです。

提供は上手くできたのに、メーカーさんへインタクトをとってみましたが、ご返信はいただけませんでした。振り返ったときに商品化に向けて発火や故障に伴う原因の所在の明確さがありました。顧客へ届けたい気持ちと、サードパーティとして関わる際のリスク管理の難しさを痛感しています。一度慎重になるために商品化のアイデアは寝かせています。

チャレンジマーケットに興味がある方へ

出店後には由利本荘市で活動されているDOGUさんに「マルシェにも出てみませんか」と声をかけていただきました。小売経験が浅いなか、サービスへのアドバイスもいただき、普段なら躊躇するところを出店の経験が後押ししてくれました。

チャレンジをする時、不安があるかもしれません。上手くいったことも上手くいかなかったことも文化創造館の雰囲気なら包み込んでくれる。商売だけでないチャレンジも出来るし、新しい出会いもあります。

最初に何かにチャレンジするなら、「文化創造館のチャレンジマーケットはいいぞ！」と言いたいですね。

聞き手：勝谷俊樹（当館スタッフ）
写真・自田佐輔（当館スタッフ）